

ため池を使った2つの自然観察会について

相 地 満 (東海市立船島小学校)

1. はじめに

今年の4月と7月に、ため池を使った2つの自然観察会がもたれた。1つは、知多地方自然観察研究会の主催した東海市大田町にある与五八池の自然観察会であり、もう1つは、東浦町教育委員会の主催による「夏休み子供自然科学教室」中に行われた、町内4つのため池を観察してまわる水生植物の観察会であった。以下は、その経過と内容のあらましである。

2. 与五八池

与五八池では、毎年11月に、地元小学校P.T.Aが主催する自然観察ハイキングが実施されており、毎年、多数の参加者を得ている(58年度150名、59年度190名)。その参加者の中から春も実施してはどうかという声もあり、活動内容を知った自然観察指導員の連絡会が計画を立て、春たけなわの4月20日㈯に実施された。開発の進む東海市内の中心にありながら、与五八池周辺に残されている自然は貴重なものであり、身近かな自然・足許の自然に親しみを持ち、関心を高めていくのに適地であるという判断でこの地が選ばれた。参加者は60名で小学校中学年生とその父兄が中心であった。春の七草・タンポポをくわしくみてみよう・こんな動物、あんな動物・みつけたらチェックしよう・池の生き物・これまでに多くみられた池の魚といま多くみられる魚・くすりになる植物・暗い林をつくる木などを観察の目あてとしていた。ため池の周辺には、いろいろな生き物がいる。それらの生き物が春になり、活発に活動する時期を迎えていた。木の芽や草の芽も伸び、七草をはじめとする春の野草達が、個性を際立たせて伸び広がろうとしている。水の中を覗いてみるとタニシが動き、かえったばかりのオタマジャクシが黒いかたまりになり、アシの根元には魚の卵がいっぱい産み付けられている。そんな、春の喜びに溢れた池と、それを包みこむ周りの環境に目を向けてみると、活動の中心になった。やがてこの地を道路が通過し、こういった静かな自然もう見られなくなるということも参加者には感銘深いものとなった。

3. 東浦町のため池

東浦町教育委員会は、本年度夏休みに5日間にわたる「子供自然科学教室」を開催し、その第1日目に町内のため池を見てまわる「水生植物の観察会」が計画された。対象者は、町内の小学3年生～6年生で30名が参加した。町のバスを利用し、午前中に黒根池と永見池、午後、立合池と藤仙坊池を観察した。東浦町は、ため池の多い知多地方にあってなお多くのため池を有し、オニバス(59年度観察の報告あり)をはじめ、今ではめずらしくなりつつある水生植物や水生昆虫の観察が可能である。そこで、町の委任を受けた4人の自然観察指導員が町内のため池をまわり、上記4つのため池が観察地として選ばれたわけである。

東浦町の池の場合は、水生植物の繁茂する季節であり、水生植物の観察を中心に行った。黒根池・立合池・藤仙坊池は、昭和56年に行われた東浦町自然環境調査団が調査した資料があり、それと現在の様子との比較ができる。水生植物の後退傾向がどの池にも見られるが、特に黒根池・明覚池にそれが顕著に見られた。明覚池は、56年の調査では全面が水草におおわれる池であった

が、現在は、わずかにヒシが点在して見られるのみであった。黒根池は、ヒシ・ガガブタが優占する池であったが、ほんのわずかになり、コカナダモが堰堤周辺に多く見受けられた。ブラックバスの10cm前後のものがかなりたくさん見られた。立合池・藤仙坊池はそれらの池の中には比較的生物層の豊かな池であった。ヒルムシロ、ジュンサイ、ヒシ、ガガブタ、ホッスモ、フラスモ、クログワイ、カンガレイなどの水草のほか、カンテンコケムシ、カワセミ、タイコウチなどの観察ができた。永見池では、クロモ、キクモ、スイレンが繁茂していた(図1)。

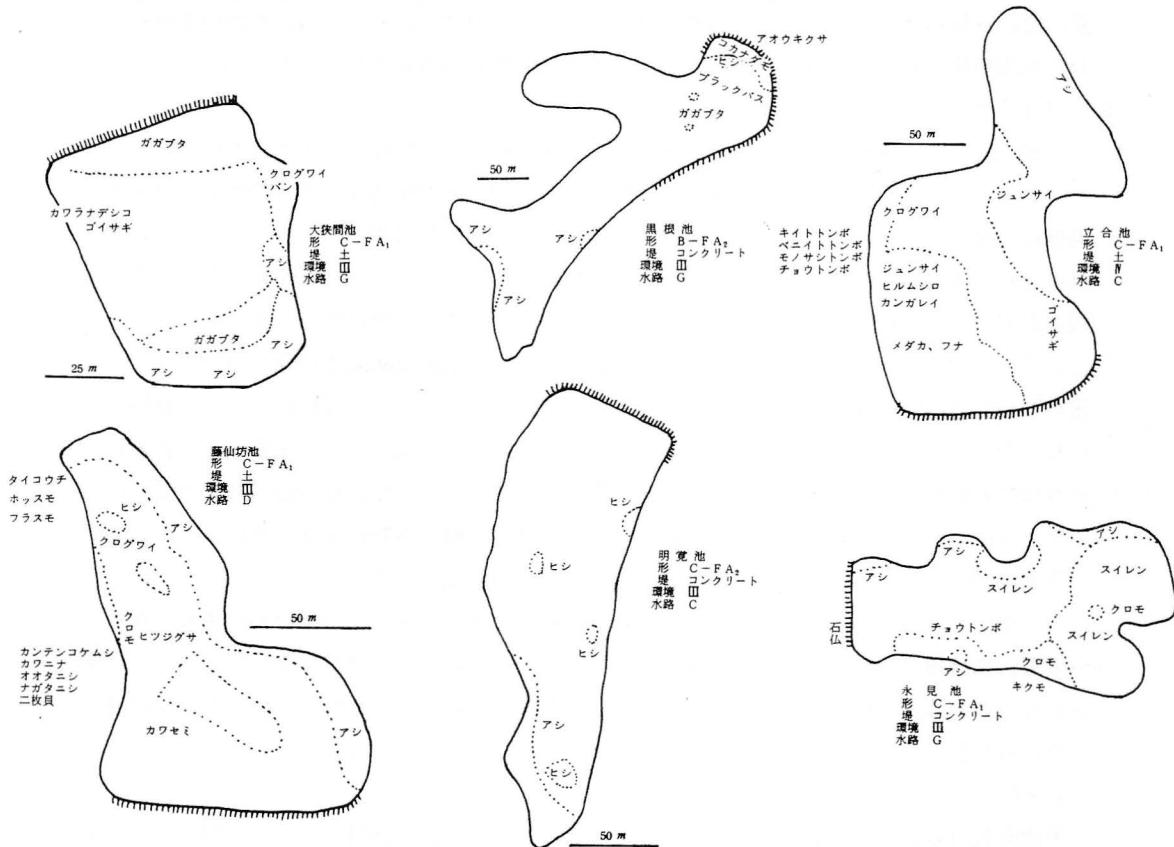


図1. 東浦町のため池 (1985. 7. 22, 7. 26 調査)

4. 今後の課題

2つの観察会に参加して思ったことの1つは「ため池の自然観察の方法と技術をさらに確かなものとして持たなくてはいけない」という事である。池の形の表現の仕方、池周辺の環境のとらえ方、水生生物の観察の仕方(特に、沈水植物、水生昆虫)、水質判定の表現の仕方、池の面積、水量、灌漑機能の測定の仕方など、参加対象者に合わせた方法・技術を豊かに持つ必要がある。同時に、池の歴史や民俗についても知っておくと、参加者は、大変興味深く池に関心を持つことが出来る。更に、種々の生物の生態や形態を池という固有の環境との関係で解明できるようになり、種の同定も正確さが必要であると思われた。それ等はとりもなおさず、今後のため池の自然研究の私の課題と不可分に結びついている。